

足利健亮著 中近世都市の歴史地理：地人書房，1984年，A 5 判，246頁，3,700円

数年前まで、京都東の河原町通りを走る市バスに「白梅図子」という停留所があった。河原町今出川と府立医大病院前の間である。そこを通過するたびに、評者は足利さんのことを思い出すのが常であった。著者の足利さんもまた、本書の第一章を、こういう名称のバス停の廃止を惜しむ叙述から始められている。

本書は、著者がこれまで学会誌等に発表された論稿と、本書出版に当たって新たに書き加えられた論稿をまとめられた労作である。本書は著者が「序章」で述べられているように、「歴史地理学的な発想と手法をもって、わが国の都市史の欠を補うこと」をねらったものであるが、ご自身の研究史の整理でもある。この点に評者は、研究者の歴史の重みを感じないではいられない。

さらに本書は、その副題に提示されているように、「町・筋・辻子をめぐって」、著者の中・近世都市史像の網目のなかに定着させられている論述は、きわめてダイナミックなのであるが、まず、本書を通じてうかがえる特質を、六つの観点から指摘しておきたい。

第一に、実証的研究を主軸に据えながらも、多岐にわたる史料に、著者の学殖からくる実感と推理が交錯して生まれてくる論理は、従来の歴史地理学が不得意としながらも、今後は切り開いていかなければならない新たな水準を画したものと見てよい。

第二に、具体的な場所の歴史地理学的復元に対して、いくつかの旧説や他説を批判されながら、自説を主張し、斬新な研究手法を盛り込んでいく著者の構想力は抜群で、読者を十分に引き付ける説得力がある。それが実証密度の濃さというものに支えられて、いっそう輝きを増している。

第三に、著者が歴史学・文学・建築学をはじめ隣接の学問に対して深い造詣をもたれ、きわめて広い視野から考証と分析を行っている点も、本書の大きな特色である。収集された史料の質・量面での高さ・豊かさには一驚する。

第四に、高度な内容ながら、平易な柔らかな記述は、日ごろの著者の魅力ある語り口から流れ出るようなスタイルである。実証的な研究事例を重んずる

歴史地理学徒の多くは、他人の註で埋まった「重厚な論文」とか、外人学者の文章のつぎはぎ細工のような難解で「深みのある評論」といったものに、アレルギーをもっているにちがいない。それらは独創性に欠ける典型であろうが、本書は、そういったペダンチックなところは微塵もない。

第五に、近時の歴史地理学の論稿のなかには、「地理学」のゆえに、年代や歴史的文脈を忘却したものがまま見られる。しかし著者は、史料と考証とで厳密に時期をおさえられたうえで、それぞれの時期に生きた人間の多様性や豊かさを、中・近世の都市の「町」の形態や生活景観の復元によってとらえられようと試みられている。それは「町」に「時」の重みを加えて、見事に成功しているといつてよい。

第六に、本書は、調べ込むことの面白さを教えてくれている。先学の業績を柱にする謙虚さに始まって、史料を探索し、古地図を確認し、現地を実測しつつ、論理を構築していく著者の労苦は、大変なものであったろうと想像するが、それが読者をして「なぞ解き」のような面白さに到達させてくれている。学問は抽象的・絶対的な存在ではなく、それを担う研究者によって性格づけられるという好個の例を、著者は本書で示してくれたのであった。

次に、本書の編序に沿って、概容を要約しておこう。

「序章」は、本書のねらいを述べられたものである。先学の業績をふまえつつも、中世都市ならびに近世都市の研究は、「町」の形態に着目し、それぞれにいくばくかの類型を見出し、そこに時期の差を浮き彫りにし、中世から近世への都市の変ぼうを考案すべきであることを述べられている。著者の取り組みられようとしている清新な視角は、随所にうかがえるのであるが、わずか6ページ弱の短文であるため、問題提起の趣旨説明に終わっているうらみがあるのが惜しまれる。後章で具体的に詳述されているのではあるが、なお多くの総括的かつ事例的な説得が、この冒頭部でも欲しかったと思うのは、評者ひとりではないと信ずる。

「第一部 道路名称としての『辻子』の考証」は、「第一章 京都の『辻子』とその意味」「第二章 再び『辻子』について—高橋康夫氏の所論を駁す—」「第三章 『辻子』の拡散」の章から成ってい

る。

第一章では、辻子（図子）という歴史的な街路名称の考証・分析・検討を、主として平安京を事例として展開されている。特に20頁から22頁にかけて、「くちなわの辻子」の例に始まる辻子・町通り・町の区別、辻子と家並みとの問題、『京町鑑』による辻子の分布などの論及は、辻子のありようが鮮やかに描きとめられている。また、27頁付近の条坊制下の辻子を、昭和10年修正測図の京都市都市計画基本図と比較して考証されるくだりは、歴史的移行過程を立体的に描き出そうとする努力が、つよく印象づけられる。

第二章では、「一、近世京都における辻子の諸事例」が圧巻である。建築史家の高橋康夫氏への反論であるが、日ごろ温厚な著者がホームグラウンドである京都のいくつかの地域の辻子を例に、豊富な史料と精妙な理論、さらに具体的な地図上での図示によって、すさまじいまでの反論を試みられている。殊に39～40頁の新生洲町界わいの考証は、『京町鑑』の筆者が家並み景観を「町」ととらえたところに着目して、辻子のありようの心髄に迫っていて、著者のなみなみならぬ力量をあらためて知らされる。

第三章では、鎌倉・敦賀・大津・坂本・兵庫津・博多・犬山・津島など、各地にみられる辻子の例をあげておられ、辻子呼称が中世京都の文化的・経済的活力の拡散現象であろうという視点に立つ結論を出されている。

以上、第一部を通して、評者に若干理解できなかったところは、第二章の「四、辻子・新道・突抜」の表題を「中世京都の辻子」ととでも改題し、同じ第二章の「一、近世京都における辻子の諸事例」の前へ移行できなかったかという疑問である。上記のように高橋康夫氏への反論が主眼であられたから致し方ないとも思うが、「三、中世における辻子—奈良の事例を中心に—」が挿入されてしまっているために、京都という都市の辻子の変遷の一貫的記述が分断されて薄められてしまっている点が惜しまれる。第三部の第七章の五で言及されているのであるが、それへの参照も繰り返し指示しておかれるのが、読者への親切というものであらうと思われる。奈良の記述のうち、57頁7行目の「それは住民の選択の問題にすぎなかったのである」という結語に、なお若干の史料的補強も欲しかった。

それはともかく、著者が辻子を執ように追求され

て20年に及ぶ成果が、本書の第一部に結実している。その結論は58～59頁に花咲いているが、辻子という忘れられたような「町」の街路の一隅に、都市史の真実や可能性があることを、著者は明らかにされたのであった。

「第二部 中世城下町から近世城下町への変化」は、「第四章 大阪の『筋』とその意味」「第五章

伏見城と城下町成立の意味—宇治川河道の延長と伏見大手筋の関係」「第六章 岐阜城下町から加納城下町への変化」の3章から成っている。

第四章は、戦国期城下町から近世城下町への変容を、「ヨコ町タテ筋型城下町」の成立に見出し、それを大坂の南北路である筋に立証されたものである。第五章は、主として伏見の大手筋の考察から、豊臣秀吉の伏見経営構想に言及されているが、槇島堤と小倉堤に関する考証は、いわば著者の独壇場とでもいべき主題である。第六章は、中世城下町岐阜と近世城下町加納との対比である。

「第三部 城下町京都の成立」は、「第七章 平安京から中世都市・京都への変化」「第八章 聚楽第城下町と二条城城下町の差異」「第九章 道路名称としての『突抜』考—近世京都研究の一環として—」の3章から成っている。

第七章は、中世の京都のありようを、「町」の形態の変化、町衆の生活、上京・下京の差異などを視点に、先学の業績に基づいて史料と地図で立証されたものである。第八章は、中世の都市史の流れのなかで京都を、宅地割や町区割と街路とのかかわりに力点をおいて考察し、古代都市から中世都市への変容を論じ、さらに近世初頭、天下人によって聚楽第・二条城などの城下町に造り替えられたことが取り上げられている。特に「五、新二条城城下町としての京都」の論述は、包括的な分析と、著者自身の言葉による位置づけが際立っていて、京都史研究のうえでも新しい体系化が看取される。第九章は、「突抜」という道路名称の意味を考察されるなかで、近世京都の「町」の一形態の側面に触れられているが、190頁の『京町鑑』などから作成された地図の提示は秀逸である。また、高橋康夫氏への反論も含め、史料を駆使して、手堅い分析が行われている。

「結章」の前半は、城下町の変遷に関する著者の図式を批判された矢守一彦氏への反批判となっているが、両大家の論争に、評者のごとき浅学者がかかわる問題ではないと信ずるので、読者各位がそれぞ

れの立場で見さだめていただければと思う。「結語」の後半は、過去の日本人が道路に名前をつけないのはなぜか、という疑問に立ち向い、著者らしい解答を導き出されている。そのなかで234頁から236頁の2行目に及ぶ記述は、歴史地理学の研究者としての著者の目が光っている。それは、今日的な視座から「道路」がもつあらゆる時間空間を、瞬時にからめとろうとする著者ならではの珠玉のような結論であるからである。

後半の章は紙幅の関係もあって十分に扱うことができず、また全体的に、著者の研究内容に立ち入ることの乏しい、読み込み不足の、曲解に基づく思いつきの書評に終始してしまったのではないかとおそれるのであるが、著者ならびに読者のご海容を得たいと思う。本書の通読という面からは、所論の重複や、編序だてに、ひと工夫いただければと思う点もないではないし、巻末に索引もほしかった。さらに研究対象地域が、近畿を中心とした西日本に偏しているといううらみもある。しかし、各章の主題に沿って挿入されている地図のことごとくが、鮮明で洗練された筆致で、著者の行論を助けているの

が貴重である。

ともあれ、わが国の中・近世都市の歴史地理学的研究を、総合的に局部的に、形態的に景観的に、そして実証的に分析的に、これほどまでに完全に近く一つの歴史像を与えた研究者は、今日まできわめて少なかったであろう。またそれは、「研究史の欠けた部分を補う」という点でも大きな役割を果たし、成功を収めたと思われる。こうして本書は、隣接の分野への問題提起の書としても、学界において高く評価され、広範な研究分野で活用されるであろうことは、疑う余地のないところである。このうえは、後学のひとりとして、著者のさらなるご精進を念ずるのみである。

評者は、この書評を執筆中に、著者の師匠であられる藤岡謙二郎先生の訃音に接した。今にして思えば、先師のご存命中に本書を急ぐように上梓されて呈上されてから公用出張の中国へと向かわれた著者の、ゆかしい心根にも、評者は深い感銘をうけるのである。

(浅香勝輔)